

補 遺

2023 年 4/29～5/07

<A>イスラム教の5柱(イスラム教徒の5義務):

- (1) 信仰告白(シャハーダ):「アッラーの他に神はなく、ムハンマドはアッラーの使徒である。」の聖句を絶えず告白する事。
- (2) 礼拝(サラート): 日に5回、決められた時間に礼拝を行う事。
- (3) 喜捨(ザカート): 慈善的な目的に使う為、自分の財産からある一定の割合を施しとして寄附する事。
- (4) ラマダーン月の断食: イスラム歴 9 月の新月の日から 1 ヶ月間にわたる期間の断食。
- (5) 巡礼(ハッジ): 身体的、経済的に可能で安全に旅ができる場合には、一生に一度メッカのカーバ神殿へ巡礼の旅をする事。

上記(3) 喜捨(の精神): 進んで金品を寄付・施捨すること。主に貧者救済に向けられる。(英語) charity, donate(動)/ donation(名)

(1) 本来は仏教用語: 利他心およびそれに基づく行為をいう。行為の形態や意味は各宗教により異なるが、同様な行為は広くさまざまな宗教に見られ、「喜捨」は一つの典型的な宗教倫理行為という広義の意味に解される。未開宗教でも、弱者・困窮者の相互扶助や有力者(裕福者)による保護は血縁意識と宗教意識の混合した力に支えられ、広く行われている。

喜捨、施し物(例文) making voluntary contributions to aid the poor.

以下、ヒンドゥー教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教での考え方を調べる。

(2) ヒンドゥー教: 古来、バラモン僧や出家修行者への財宝の施しは功德(くどく)ある行為とされている。仏教の喜捨は、このヒンドゥー教の理念を受け継いだものと考えられている。

(3) ユダヤ教: 『旧約聖書』に喜捨の具体的な言及がみられ、神の義にかなう行為、贖罪(しよざい)の行為とみなされている。

(4) キリスト教: 貧者への施しはイエスの説いた愛の教えの端的な実践であると考えられ、古代・中世には広く行われ、今日もその伝統は続いている。

(5) イスラム教: 信仰義務の一つである(a) ザカート(定めの喜捨)と、(b) サダカ(自由喜捨)がある。

(5)-a. ザカートはかなり初期に救貧税として制度化され、さらに後のイスラム法の体系化に伴い、課税対象、税率、使用用途などが詳細に規定された。-

(5)-b. サダカは個人の自由意志に委ねられ、贖罪行為としても認められる。喜捨による財は、貧者、孤児、税徴集人らに配られ、また伝道、聖戦など宗教活動に用いられる。コーランでは、両者の区別は明確ではなく、サダカが「誠意」を、ザカートが「心の清浄」を一般に意味することから推しても、両者ともに喜捨の精神が重視されることは明らかである。各個人の信仰心に基づき、同

時にその共同体を正しく維持することがイスラム教の理念であり、喜捨はその理念を端的に表現している。

(6) バクシーシー 英語:ba(c)ksheesh, ba(c)kshish, back:バクシーシーは中東や南アジアにおける、欧米のチップ(心付け)に似た慣習で、富者が慈善活動として貧者に少額の金銭を恵む・施すことで徳を積む、貧者は富者に金銭を(半ば当然の権利として)要求する、というあり方のこと。(2021年2月18日更新)

上記(4) <C> ラマダン考

(1) ラマダンとは:(#)ヒジュラ歴(太陰暦)の第9月のこと。この月は日の出から日没までの間、イスラム教徒の義務の一つ「断食(サウム)」として、飲食を断ちます。イスラムの歴史において、コーラン(クルアーン)が預言者ムハンマドに啓示された月。

(#)ヒジュラ歴:イスラム歴。閏年を使う太陽暦とのズレが毎年11日ずつ早まる。

(2) 意外と知らない「ラマダン」、3つの深い意味:ラマダン日没後に無料で食事が振舞われる理由



(ともに寄り添い食事をするイフタール)

(2)-a. 1カ月間、食を断つ「ラマダン」が始まった。日が出ている間は一切の飲食をしないことで知られるが、日没後、はじめてとる食事「イフタール」をご存じだろうか。イスラム文化圏では、街角やモスクや職場で無料の食事が振る舞われ、みんなでイフタールを楽しむことが習慣となっている。勿論日本の中のイスラムコミュニティでも今、各地でイフタールが行われている。これはイスラム教徒ではない日本人でも歓迎してくれるのだ。

まるで万華鏡のような、精緻な文様が天井の高いドームの内側を覆う。左右対称の幾何学的なアラベスク文様は、ドームだけでなく白亜の内壁を彩っている。ステンドグラスから差し込むやわらかな光。日本最大のモスク、東京ジャーミイ(代々木上原)の礼拝堂に立つと、どこか中東の世界遺産を見ているような気がして、東京だということを忘れる。

夕方の礼拝を終えると、誰もが三々五々、階下に降りていく。1階ホールの前ではいくつもの大鍋を並べて、料理を振る舞っていた。この日のメニューは鶏肉とキノコの煮込み、野菜スープ、パスタ、それにチョコレートのプディングだ。



(代々木上原駅から徒歩5分ほどの場所に立つ東京ジャーミイ)

トレーにたっぷり盛ってもらいホールに入ると、すでに大勢の人々がにぎやかにテーブルを囲んでいた。その顔立ちはさまざま。東南アジア系、インドや中近東、アフリカの人々...共通点はただ1つ、イスラム教徒であるという事。

太陽はやっと沈んだ。今日の断食は終わりだ。そしてイスラム教徒がともに寄り添い、同じカマのメンを食う「イフタール」が行われる。1日の空腹と疲れを癒やす様に、そしてイスラム教徒同士のつながりを確かめる様に、楽しく語らいながら食事をとる。これらはすべて無料で振る舞われている。そして東京ジャーミイでは、イスラム教徒でなくとも、誰でもイフタールに参加することができるのだ。

イスラム暦におけるラマダン月は、「断食(サウム)」の習慣で知られている。イスラム教徒はおよそ1カ月、日が出ている間はいつさいの飲食を断つ(妊婦、子供、病人、旅行者などは別)。

イスラム教徒にとっては特別な1カ月であるのだが、どうして断食をするのだろうか。東京ジャーミイの広報で、自らもイスラム教徒である下山茂さんが言う。「日本人は単に厳しい戒律と思っているかもしれませんが、実はさまざまな意味が込められているのです」

(2)-b. 欲望を抑えることを学ぶ1カ月

近代以降の資本主義は消費を果てしなく迫ってくるが、少し立ち止まってみる。1カ月だけ飲食を制限し、食欲を小さくしてみるのだ。我慢と忍耐を覚えて欲望をうまくコントロールするように努める事も人間には必要ではあるまいか。

(2)-c. 食に感謝する1カ月

断食のあとは、まず渴いた喉を一杯の水で潤す。そのおいしいこと。そしてデザート(ナツメヤシ)をかみしめる。その甘いこと。きっと、味わうことそのものに感謝をする。食へのありがたさを再認識させてくれるのだ。

断食を通して食事や命の尊さを知る。これはイスラム教だけでなく、キリスト教やユダヤ教や仏教にもある考え方だ。

(2)-d. 心身をリセットする1カ月

「日本の12月に近い発想で、1年を振り返り大掃除をして新年を迎える準備をする。ラマダン(断食)も同様なのだ。食事を制限して胃腸を休ませる。できるだけ心穏やかに努め、イフタールを通して家族や友人を大切にして、気持ちも新たにす。断食は結果として心身の健康につながるのだ。

そしてラマダン月が明けると、イードというお祭りとなる。着飾って家を訪問しあい、子どもたちにプレゼントをして、日本の正月のような雰囲気包まれる。

「こうしたさまざまな意味が込められているので、断食というよりも仏教用語でいう『齋戒』(サイカイ)に近いのであろう」

(以上)